

市民力かわら版



矢板の街が面白くなってきた ココマチが街を変える？

五月二十日、矢板駅東口にプレオープンした商業施設「ココマチ」。九月に予定しているグラントオープンに向けて着々と準備が進んでいる。廃業などで店舗が減少する矢板の商店街に活気を取り戻すための大いなる実験が始まったと言える。

この施設を運営するのが商工会有志が立ち上げた「**株街 なかにぎわい館**」だ。始まった経緯や現状を、取締役の一人で矢板市商工会副会長の代田有史氏に伺った。

●人が集える場所を
三年ほど前、商工会のなかで、「まちなか活性化委員会」と称し、十人程で矢板の活性化を考える集まりを月一回開いていた。
減少する商工業者の数に危機感を抱き、残った店だけでも生き残っていくために何が必要なかをさまざまな角度から議論した。
そこで出てきたのが、「人が集える場所を作り、店主と顧客が出会える状況を作ることが必要ではないか」という



人と人が出会う場所ができた

ことだった。
●なぜ人が集う場所なのか
「矢板に限らず、個人商店などでもっとも不足しているのが新規顧客の開拓だ」と代田さんは話す。
大型店やネット通販の普及で、来店者は減る一方。お客を増やすには、値段の勝負ではなく、その店の特徴や技術、ノウハウなどを含めてお客様に理解してもらい、その店で買うメリットを感じてもらわなければならない。

●実験、実践の場としてのココマチ
危機感をバネに、今後の方向性を探り実験、検証していくのがココマチの使命だと考えている。だから、ココマチだけで利益を上げるのではなく、各事業者で利用できる場所を目指している。
その具体例の一つがサポート制度だ。一定の金額を負担すれば、ココマチのホームページを使って情報発信したり、二階のスペースをイベント会場として使うことができる。権利などが得られる。ココマチをサポートしてもらいながら、ココマチがサポートもしているという両方にメリットのある関係ができる。
そのために、ホームページも、毎日一度はのぞいてみた

れ持っているこの地域のお客様をみんなが共有し、生の触れ合いを通していろいろな情報を手渡したり、自分たちも勉強することが必要だ。
しかし、個々の店でそれを行うのは、現状では難しい。ならば、できる人が力を合わせてそういう場所を作ろうという結論に達した。

●今後の方向性
プレオープンしてみても、思っていた以上にミドルエイジの女性の来店が多いことが分かったり、レンタルボックスが人気で急ぎよ倍に増やすなど、嬉しい誤算もあった。その他にも、今後の展開を考えていくヒントがいくつか見つかった。
今は、やっと離陸した状態だが、グラントオープン後は「ここに来れば何か面白いことをやっている」と、興味を持ってもらえるような各種イベントを企画していく。
各種セミナーやパーティのようなことに使ってもらったり、コンサートやジャズ演奏、映画会など、アイデアはたくさんある。
また、商工会で行っている創業塾卒業生の受け皿としての役割もあり、その延長で地元事業者のコンサルタント的な仕事もやるようになると考えている。
将来的には、二十〜三十代の若い経営者が、新しい発想で事業に参加してくれればと願っている。

●今後の方向性
プレオープンしてみても、思っていた以上にミドルエイジの女性の来店が多いことが分かったり、レンタルボックスが人気で急ぎよ倍に増やすなど、嬉しい誤算もあった。その他にも、今後の展開を考えていくヒントがいくつか見つかった。
今は、やっと離陸した状態だが、グラントオープン後は「ここに来れば何か面白いことをやっている」と、興味を持ってもらえるような各種イベントを企画していく。
各種セミナーやパーティのようなことに使ってもらったり、コンサートやジャズ演奏、映画会など、アイデアはたくさんある。
また、商工会で行っている創業塾卒業生の受け皿としての役割もあり、その延長で地元事業者のコンサルタント的な仕事もやるようになると考えている。
将来的には、二十〜三十代の若い経営者が、新しい発想で事業に参加してくれればと願っている。